The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国軍事思想史研究の現状と課題
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	中国研究集刊. 1998, 23, p. 45-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61212
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国軍事思想史研究の現状と課題

湯浅邦弘
（大阪大学）

一九七二年、山東省臨沂県銀雀山漢墓から大量の竹簡が発見された。そこには、『孫子』『孫臏兵法』『尉繚子』『六韜』などに比定される古代兵書、更には、「守法」「守令」などの篇名を持つ古佚兵書（注1）が含まれていた。この発見により、中国古代の軍事史・軍事思想史の研究は新たな局面を迎えることとなった。

従来、「軍事」「戦争」「平和」などを主軸とする中国思想史研究は、ほとんど構想されることがなかった。その直接的要因として挙げられるのは、資料上の制約という問題である。中国の戦争観や軍事思想を研究しようとする際、主要な研究対象として先ず想起されるのは、古代に於て「兵」を専論した「兵書」である。春秋戦国時代には、慢性的な戦争状態を背景に、数多くの兵書が産出されたという。しかし、秦帝国興亡の混乱を経て、漢初に張良や韓信が図書整理を試みた後には、三十五家が残存するのみとなっていた。そして、後の宋代に主要な七部の兵書が「武経七書」として総括された後は、専らこの七書のみが代表的な兵書として伝えられてきたのである。

しかも、この七書の筆頭に挙げられる『孫子』を初め、これら古代兵書には、その資料的価値に対する疑義が古くから提出されてきている。『孫子』は、現行本十三篇が春秋時代の孫武に関わる兵書なのか、戦国時代の孫臏に関わる兵書なのか、という成立の最も根幹に関わる部分に疑義が持たれ、また『呉子』『司馬法』『尉繚子』『六韜』『三略』も、すべて後代に仮託された偽書、或いは少なくともその一部に後世の偽作部分を含むと考えるのが通説となっていた。こうした資料的問題が、中国の軍事思想史を構想せんとする際の、最大の障壁になって来たと考えられるのである。

銀雀山漢墓竹簡の発見は、こうした資料的制約という障

壁を打ち破り、新たな研究を展開させるのではないかと期待される。

そこで、本稿では、改めて、中国軍事思想史研究の現状を概観し、出土資料の発見によって新段階を迎えた研究の動向について、筆者なりの展望を記してみることとしたい。但し、ここでは、その主要な対象を、中国・日本に於ける古代軍事思想研究に限定する。無論、西洋にも、クラウゼヴッツの『戦争論』との対比という観点から『孫子』に注目し、或いは、現代世界に於ける中国の軍事動向という関心から、中国の軍事や伝統的戦争観に言及するものは見受けられる。しかし、やはり、個々の資料に即した実証的な研究という点で、先ずは中国・日本の研究を精査すべきであると考える。また、古代を中心とするのは、それが中国軍事思想の形成期に当たっており、そこで形成された軍事思想の基本的特質が後世にも甚大な影響を与えていると推測されるからである。

以下では、中国哲学史・思想史研究に於ける軍事思想の取り扱い（中国）、軍事史・軍事思想研究の状況（中国）、日本に於ける研究の概況、という三つの節を設定し、順次、主要な先行研究について批評を加えていくこととしたい。

一

先ず、二十世紀の中国思想史研究に大きな影響を与えた業績として、胡適『中国哲学史大綱』上巻（一九一九年）がある。その研究は、「新しい立場で書いた哲学史として画期的な意味を持」ち、「哲学史のあり方や中国哲学全般の見とおしを述べていて、内容の新鮮さとあいまって、内外に対して大きな影響を与えた」（金谷治「思想史とは何か」、大修館書店・中国文化叢書三『思想史』、一九六七年）とされる。しかし、その構成が「老子」「孔子」「墨子」などの諸子分類によっていることからも明らかな如く、その主目的は、著名な諸子ごとの思想的特質を解明するという点にあった。そこには、それらを縦断する大きな主題、例えば「軍事」「戦争」という視点などは設定されていない。

こうした思想史の記述は、その後の思想史研究に影響を与え、その基本的枠組を規定していったように思われる。例えば、馮友蘭『中国哲学史』（一九三四年）は、先秦時代を「子学時代」、漢代以降を「経学時代」と二大区分した上で、各々著名な思想家を取り上げ、その思想的特質を分析するとの体裁を採っている。子学時代では、尹文、宋鈃の「寝兵」説（兵を寝むという反戦思想）に関わる資料が紹介されてはいるが、それは「戦争」「平和」という視座を全面に押し出した結果ではなく、あくまで、戦国時代

の諸子の一人として取り上げられたに過ぎない。

これに対して、郭沫若『十批判書』（一九四五年）は、「孔墨的批判」「儒家八派的批判」「稷下黄老学派的批判」「呂不韋与秦王政的批判」など、やや主題的な章立てとなるが、その基本は、やはり諸子ごとの思想的特質の解明にあり、むろん全体を縦断する「軍事」という視点などはない。但し、同じく郭沫若の『先秦学説述林』（一九四五年）には、「述呉起」の章に呉起が取り上げられている。これは、所謂「兵家」の思想家を一つの章に独立して取り上げた早い例として注目されよう。

次に、侯外廬等『中国思想通史』（一九五七年～六〇年）は、思想の歴史的展開を描写せんとし、「殷代的宗教思想」「西周城市国家的意識形態」など、諸学派の思想の基盤となる宗教意識や社会意識にも配慮した点に特色を持つ。しかし、基本的な枠組は、「老子思想」「荘子的主観唯心主義」「思孟学派及其唯心主義的儒学思想」「中国古代思想的綜合者—唯物主義思想家荀子」などの伝統的諸子分類に過ぎず、また、その基本的方法論も、唯物史観に基づき、各々の評価を唯心論・唯物論という枠組で示すというものであった。

これら、初期の思想通史には、軍事という観点はおろか、著名な兵家さえほとんど取り上げられることはなかった。特に、侯外廬等の『中国思想通史』に見られたような、史的唯物論による思想評価は、その後の思想史研究にも継承され行くこととなった。

ところが、こうした方法論が、一方では、先秦兵家の思想に対する再評価を促していくこととなるのである。例えば、任継愈『中国哲学史』（一九六三年）は、その第二編第三章に「『孫子兵法』的弁証法思想」として『孫子』を独立して取り扱い、また、付録二に「『孫臏兵法』中的朴素唯物主義和朴素弁証法」を掲げる。孫子・孫臏の思想に大きな注目を寄せていることが分かるであろう。即ち、『孫子』に対しては「弁証法思想」、孫臏の思想については「朴素唯物主義和朴素弁証法」という観点から評価を与えようとしているのである。確かに、『孫子』や『孫臏兵法』には、旧来の呪術的思考や「勝敗は時の運」といった場当たり的な思考を排し、人為的努力によって勝利を得んとする合理的精神が窺える。また、正攻法と奇策との柔軟な使い分けを「奇正」概念によって主張する。こうした点が、古代軍事思想に於ける唯物論的思考や弁証法的思考の存在という評価につながっていったのである。しかし、これは、唯物史観に基づく思想評価が、孫武・孫臏の思想を個別に見出した結果であり、「軍事思想」「戦争」「平和」といった主題のもとにその思想史的意義を解明せんとするもので

はない。

そして、兵家に対するこうした方法論からの思想評価が、以後の研究に於ても基本的には継承されていく。馮友蘭『中国哲学史新編』（第一冊一九八〇年修訂本、第二冊一九八三年修訂本）は、社会経済史の研究業績を踏まえ、諸子の思想形成の基盤として、春秋戦国時代の社会変動に注目した。「新編」と称する所以である。そこでは、第一冊第六章に「春秋末期軍事思想和経済思想中的唯物主義和弁証法」として、孫武・范蠡・計然が取り上げられ、第二冊第一七章には、斉の「軍事思想」が僅かに付録として取り上げられている。

また、北京大学哲学系の『中国哲学史』（北京大学哲学系中国哲学史教研室写、一九八〇年）も、第一編から第五編まで計五二章中、軍事に関して専論した章は第一編第三章の一章のみであるが、それは、「孫武奇正相生的軍事弁証法思想」というタイトルから明らかな如く、『孫子』の「奇正」概念に弁証法的思考の存在を指摘するものである。同じく、孫叔平『中国哲学史稿』（一九八〇年）も、第一編第九章を「兵家」の章とし、孫武と孫臏を取り上げている。しかし、他の兵家については言及せず、また、孫武・孫臏についても、その思想を体系的に理解するというよりは、その中から、唯物論的、弁証法的思考を抽出せんとする意識が強い。これらは、その取り扱いに濃淡の差はあるとしても、基本的には、孫武・孫臏の思想の中に、唯物論的要素や弁証法的思考を見出さんとする点に於て、基本的には同一の研究手法によるものと言えよう。

しかしながら、これら思想通史に於ても、「兵家」の取り扱いが徐々に増大してきたことは疑い得ない。例えば、孫開泰『中国春秋戦国思想史』（一九九四年）は、近年刊行された百巻本中国全史の一冊であるが、全十五章の内、第五章に「兵家始祖孫武的軍事哲学思想」として『孫子』が、また、第十一章「稷下学官与百家争鳴的高潮」の一部に「兵家孫臏及其軍事哲学思想」として孫臏が取り上げられている。また、この百巻本中国全史には、『中国春秋戦国軍事史』『中国秦漢軍事史』『中国魏晋南北朝軍事史』など、各時代の「軍事史」巻があり、各巻、軍事思想についても若干の言及がなされている。

その他、個別研究の中に於ても、兵家の思想は次のような観点から注目されてきている。先ず、徐大同ほか編著『中国古代政治思想史』（一九八一年）は、政治思想という観点からの古代通史であり、一九七六年初版の『中国政治思想史』の改訂版である。その第三章第二節「前期法家的変法革新思想」の中に、李悝・商鞅・申不害などとともに「呉起的改革主張」として呉起が取り上げられている。呉起は、

魏の文侯・武侯に仕え、西河に於て対秦防衛に尽くしたと伝えられる（注2）が、その呉起の施策を、ここでは、李悝・商鞅・申不害など所謂「前期法家」の「変法革新思想」に連なるものとして評価するのである。

また、同じ呉起についても、傅剣平『縦横家与中国文化』（一九九五年）の評価は異なっている。ここでは、第二章「縦横家的発展」の中に「初期的縦横家」として子貢とともに呉起が挙げられている。即ち、「縦横家」の先駆的存在という意義づけである。

更には、涂光社『勢与中国芸術』（一九九〇年）は、中国古典美学範疇叢書の一冊であり、一見軍事とは無関係のようであるが、その第一節の二に「兵法中の勢」として、『孫子兵法』、『孫臏兵法』、『淮南子』兵略訓の「勢」を取り上げる。即ち、『孫子』以来、兵書の中では重要な軍事用語である「勢」を、「古典美学範疇」という観点から評価しようとする立場である。

二

このように、近年急速に兵家の思想への注目が高まってきた背景としては、やはり、一九七二年の銀雀山漢墓竹簡の発見を挙げることができるであろう。中国では、こうした考古学的成果をも取り入れた古代軍事史研究が活況を呈してきている。以下では、「軍事思想」の枠をやや逸脱する嫌いもあるが、近年の中国に於ける古代軍事思想史および軍事史研究の状況について概観してみたい。

「軍事思想史」を明確な主題として掲げた思想通史の内、最も早いものとして注目されるのは、中華学術院中華戦史研究協会編の『中国軍事思想史』（華岡出版有限公司、一九六八年）である。この書は、先秦・中古・近代に時期区分した上で、先秦については、儒家・道家・墨家・法家・（太公望）呂尚・孫武に分けて概説している。また、「総結」では、武器・軍事組織・軍隊機動力・軍事教育等の観点から時代区分を示した後、西方文化との比較を通して中国軍事思想の特色を論じている。即ち、中国を農業生活型文化、西方を遊牧（商業）生活型文化と規定し、前者の特質を「防守思想、謀略の重視、平和主義」「性善説、外界との友好」「天人合一、強調を主とする」「仁義の重視、徳を以て人を服す」、後者の特質を「進取思想、戦争重視、遠略主義」「性悪説、外界との対立」「天人対立、闘争を主とする」「功利の重視、力を以て人を服す」などと、対立的に捉えるのである。

この試みは、何より軍事思想を主題とした通史の記述として注目される。しかし、中国軍事思想の形成期である先

秦時代の分析が、儒家・道家・墨家などという後世に設定された学派分類によっている点は、やはり従前の思想史研究に見られた諸子中心主義の発想を大きくは抜け出ていない。また、そこで取り上げられる兵家が孫武のみであるというのもやや期待はずれの感がある。しかも、その孫武の分析も、『孫子』十三篇の篇ごとの概説に過ぎず、『孫子』に対する文献学的批判やその思想の体系的理解、思想史的意義の評価などは希薄な印象を受ける。更に、結論として示される、文化と軍事思想との関係の指摘も、東西両文化の比較として興味深く思われるものの、極めて漠然とした二分法であり、そのように規定して良いのか、なお充分な検討を要するように思われる。また仮にそのように規定されるとして、そうした特質が何故どのように形成されたかについての分析がなされなかったのも残念に思われる。

次に、極めて特色ある研究として、曾國垣『先秦戦争哲学』（台湾商務印書館、一九七二年）がある。これは、西洋哲学の形式を用いた戦争論研究である。戦争本体論・戦争価値論・戦争認識論に三分割して先秦の軍事思想について論じている。しかし言うまでもなく、当時の思想家達は、本体・価値・認識という枠組に沿って議論を展開していた訳ではない。方法論の一つとしては有効であると思われるが、こうした方法論を古代中国にそのまま適用できるのかどうか、中国固有の特質や思想史的意義は何か、等については、別に考察の必要があるようにも思われる。例えば、戦争本体論の場合、戦争の定義、種類、目的、手段などの項目ごとに、関係資料が列挙される。その資料自体は貴重であるが、その枠組は、儒家・道家・兵家など後世に設定された諸子分類であり、兵家の資料がそれほど充実している訳ではない。また、本論の前に、「先秦時代およびその時代の思潮」「先秦諸子」の概説がなされているが、各資料の原典に対する文献批判がなされていないために、時代と思想の関係は極めて漠然とした印象に止まっている。

これらの研究は、軍事思想を主題にしたという点に於て、その先進性を高く評価できると思われる反面、その考察の基礎となる資料については学的追究が緩く、結局は、方法論を模索した段階に留まっているように見受けられる。その主要な原因としては、やはり、軍事そのものを主題として掲げるような学的風潮がなお充分には形成されておらず、また、『孫子』『呉子』といった肝心の基礎資料についても、その成立状況がなお多くの謎に包まれていたことなどが挙げられよう。研究は、隘路に突き当たっていたのである。

こうした状況に新たな展開を齎したのが、一九七二年に発見された銀雀山漢墓竹簡である。これを機に、『孫子』『孫

臏兵法』に関する研究は、新時代を迎えることとなる。そして、同じく銀雀山漢墓から出土した古逸（兵）書の全貌が明らかにされた一九八〇年代に入ると、これら出土資料をも踏まえた軍事史・軍事思想史の研究が登場するようになり、更には、アヘン戦争以後二十世紀前半に至る所謂「半植民地半封建社会」、二十世紀後半の大陸と台湾との緊張状態などを背景にしたと思われる切実な研究も見られるようになった。

先ず、一九八三年から刊行が開始された『中国軍事史』（『中国軍事史』編写組編、解放軍出版）は、第一巻『兵器』、第二巻『兵略』、第三巻『兵制』、第四巻『兵法』、第五巻『兵家』、第六巻『兵墨』、附巻『歴代戦争年表』から成る大著である。この内、第四巻の『兵法』（一九八八年）は、「建国以来第一部研究我国古代軍事思想史的専著」（同書、内容提要）と紹介される通り、著名な兵書・兵家を取り上げつつ、古代から近代に至る各時代の軍事思想を通論するものとなっている。ここでは、出土資料として『孫臏兵法』を取り上げる他、先秦諸子の軍事論著として、兵家以外の文献、例えば、『老子』『管子』『墨子』などにも言及する点に特色を持つ。また、通時代的な見通しとして、夏・殷・周三代を「中国奴隷制社会における戦争形態と軍事思想の発生・発展」、戦国時代を「発展」、秦漢から隋唐を「開疆拓土の鼎盛時代」、宋代を「「消極防衛」「以歩制騎」等の戦略の錯誤」、「明代」を「火器」の導入による「軍隊編成、装備、戦法上の顕著な変化」などと評価した後、清代については、「半植民地」化を招いた「閉関自守、自己陶酔、夜郎自大」の政策が中国の「科学技術、工業、商業、兵器研究、国防施設、軍事思想、軍事学術」等に停滞を齎したと厳しく批判している。

これは、軍事思想の「発展」や「停滞」を各時代の政治状況と結びつけて考察し、最終的には、中国が西洋に遅れをとったのは何故かという歴史的問いに答えようとするものである。軍事思想の「発展」「停滞」の時期やその要因をどのように考えるかについては、以下の諸論考との間に相違も見られるが、中国「兵法」の歴史が国家的事業としてまとめられたことは、以後の軍事研究史に多大な影響を与えることになったと推測される。

次に、雷海宗『中国文化與中国的兵』（里仁書局、一九八四年）は、中国文化の特質を「無兵の文化」と規定し、その歴史的経緯を論ずるものである。上編第一章「中国の兵」では、春秋、戦国、秦代、楚漢の際、西漢初期、漢武帝、武帝以後、東漢、漢末以後に分けて中国の軍事史を概説する。例えば、隋から盛唐が北朝外族の制度を襲って実行した半徴兵の府兵制を、漢代以降、唯一の中国自治体制

であったとする一方、「文徳の偏重」が人を文弱にし、外患を招いた、と論じている。そして、上編第四章「無兵の文化」では、中国文化の特質を、真の兵や国民の存在しない「無兵の文化」であるとし、中国は後漢の和帝代（八九～一〇五）を過渡期として衰弱に向かい、民族の尚武精神が消失して、帝国の軍隊は胡人を主幹とするに至った、と中国史を展望する。ここには、『孫子』を生み出した中国の軍事思想が何故その後発展を遂げなかったのか、またなぜ後に征服王朝の成立をさえ許すに至ったのか、という大きな自問があり、著者がそれに「無兵の文化」という文化的特質によって答えようとしたことが分かる。

こうした自問が軍事研究の主要な動機になっていると思われるものは数多い。例えば、『先秦軍事研究』（軍事科学院戦略部・後勤学院学術部歴史室編、金盾出版社、一九九〇年）所収の張麗栄「論『左伝』軍事観的二重性」は、『左伝』に見られる軍事観を、「道徳」と「功利」に対する二つの価値観の相違として把握し、この内、道徳性の重視、即ち「仁義を以て本と為す」という価値観の思想的影響が、秦漢以後の軍事思想の発展を緩慢にしたと論ずる。これも、中国の軍事思想がなぜ発展しなかったのかについての一つの解答を提示せんとするものである。

また、李訓詳『先秦的兵家』（国立台湾大学出版委員会、一九九一年）は、先秦時代の兵家に注目することにより、中国兵家の基本的特質、およびその行方を展望しようとするものである。先ず著者は、中国兵家の特質として、兵家が軍事的および国政的に重要な位置にある「将相不分」の伝統、および兵家が必ずしも軍事ではなく文人戦略家（例えば太公望呂尚・諸葛孔明）であること、の二点を指摘している。また、「先秦兵家」の範囲を従来よりはかなり広く設定し、後世にその兵法・事跡が伝えられている者（司馬穰苴、孫武、孫臏、商鞅、呉起など『漢書』芸文志の「兵書略」に見える人物）のみならず、その兵法は伝えられていないが、史伝にその事跡が伝えられている名将（田忌、龐涓、田単、趙奢など）、兵法・事跡とも明確には後世に伝えられていない者（太公学派、稷下の兵家、『漢書』芸文志に分類される「兵陰陽」「兵技巧」著述の作者、黄石公、鬼谷子、鶡冠子などの隠君子の流）等を加えて考察を進めている。この内、「兵家」の範囲を拡大して検討しようとした点は重要である。従来の研究では、軍事・兵学と言えば、『孫子』『孫臏兵法』であり、せいぜいこれに加えて『呉子』までであった。ここでは、そうした既成観念に疑問が投げかけられているとも言えよう。

そしてこの研究に於ても、右の諸研究と同種の自問がその背景に存在していると思われる。著者は、兵書の流伝に

ついて、兵学は漢代に於て博士の類の専門官を設置させることなく、民間からその人材を登用し（例えば諸葛孔明）、また、軍事からは離脱し、広く実生活の処世術として発展した（例えば『三十六計』など）と論ずる。更に、先秦兵家の行方として、君主と将軍の緊張関係や兵家の政局への参入が兵家の末路を暗示しているとし、「（商君・白起・呉起・文種）此の四子は、功を成して去らず、禍此に至る」（『戦国策』秦三）という『戦国策』の記載を指摘している。即ち、先秦から漢代に至る兵家の行方がその後の軍事思想の長き停滞を暗示しているとするのである。

一方、先の思想通史に於ける軍事思想の取り扱いにも見られた如く、兵家は、その合理的思考、「奇正」を取り混ぜた柔軟な思考といった点に高い評価が与えられる場合がある。方克『中国軍事弁証法史（先秦）』（中華書局、一九九二年）は、その書名から明らかな如く、「弁証法」を視座とした軍事思想研究である。そこでは、弁証法的思考の有無やその程度によって各々の軍事思想が評価されている。例えば、「先秦軍事弁証法思想」と「先秦哲学思想」の関係について、老子の軍事思想には、「唯心論的弁証法」が窺え、『管子』『孫子』『孫臏兵法』『呉子』および范蠡・商鞅・荀子・韓非子などの軍事思想には「素朴唯物論的弁証法」が看取できる、と説かれている。

そして結論的には、「先秦軍事弁証法思想」は次のように分類される。先ず学派分類として、老子軍事思想学派、管子・孫子から呉起・孫臏・商鞅に至る法家軍事思想学派、黄老軍事思想学派、荀子軍事思想学派。次に流派分類として、「剛柔」軍事思想流派、「軽重」軍事思想流派、「奇正」軍事思想流派、「陰陽」軍事思想流派、である。著者の考察は多岐にわたり、また、取り上げられる思想家も多く、充実した内容となっている。

しかしながら、いくつかの問題点も見受けられる。先ず、「弁証法」的要素の有無の抽出やその評価に集中する余り、各々の資料についての文献批判が充分に行なわれていない嫌いがある。その結果、『管子』『孫子』『司馬法』などが春秋時期の軍事弁証法として規定され、後世の偽書であるとの疑惑がつきまとう『呉子』『尉繚子』『六韜』なども、資料的検討を経ないままに、戦国時期の軍事弁証法として取り扱われている。また、学派分類の内、「老子軍事思想学派」は「学派」として存在するのか、管子・孫子・呉起・商鞅などは一学派としてまとめ得るのか、等の疑問が持たれる。同様に、流派分類における四つのキーワードは各々重要であると思われるが、それらが「流派」を形成していたとする点には疑問が持たれる。総じて、従来漠然と捉えられてきた軍事思想の特質を、多角的に分類して提示せ

んとする姿勢は高く評価できるものの、一方で、それらの「学派」「流派」としての独立性、相互の関係、展開の様相などの側面については充分な検討がなされていないように思われる。

しかし、この研究はやはり、従来の軍事思想研究に比べて極めて充実した側面を持っている。それは、銀雀山漢墓竹簡『孫臏兵法』や馬王堆漢墓帛書『経法』などの出土資料を取り上げ、しかも、それらで各々一章を構成している点である。もっとも、各々の思想評価は「弁証法思想」という視角からなされており、また取り上げられる出土資料も『孫臏兵法』と『経法』等四篇に限定されてはいる。しかしこの書の刊行は、一九九〇年代に入って、出土資料を踏まえた軍事思想史研究が漸く登場してきたことを物語っているであろう。

同じく、馬王堆漢墓帛書『経法』等四篇を取り上げたものとして、張雲勛『中国古代軍事哲学発展史簡編』（中国広播電視出版社、一九九二年）がある。ここでは、古代兵書の特徴と軍事哲学の伝統として、早期の成熟、豊富な内容、濃厚な哲学的色彩などを指摘し、逆に、古代兵書の「欠陥と不足」として、緩慢な発展、旧説の因襲、創造性の欠如、偽託の風の盛行と古代兵書の神秘的色彩、等を指摘している。また、後半では、中国古代軍事哲学の基本範疇を、戦争観、知兵論、治軍論、用兵論の四点から論じている。

この内、前半に指摘される古代兵書の特質、特に「欠陥と不足」に関する考察は、右の諸書と同じく、漢代以降の軍事思想の停滞を念頭に置いたものである。また、春秋戦国時期の軍事哲学として、「黄帝書」（馬王堆帛書『経法』等四篇）を取り上げるのも評価できる。しかし一方、『呉子』『六韜』『司馬法』『尉繚子』などの伝来の兵書に対して文献批判がなされていないのは問題である。また、後半に示される中国古代軍事哲学の「基本範疇」も、軍事思想の重要語をほぼ指摘していると思われるが、それらの史的展開に関する説明が不充分なため、やや羅列的な印象を与えている。

この他、「戦略思想」という観点から中国思想を俯瞰しようとするものに、鈕先鍾『中国戦略思想史』（黎明文化事業公司、一九九二年）がある。結論的には、先秦時代を中国戦略思想の「開創期」、秦漢時代を「成熟期」、中古（魏晋から宋）時代を「衰退期」、元明清三代を「蛻変（変質）期」と位置づける。「戦略」の語は中国古代の文献には見えないが、ここでは、実質的にはそうした観念が古代から存在したとし、例えば、遠交近攻、強制移民、郡県の設置など政略的措置を多用する所に中国的「戦略」の特質を見出している。

私見によれば、戦術・戦略・政略という近現代の概念によって古代の軍事思想を区分するのは容易ではないと思われるが、この研究は、結果的に、軍事思想史と政治思想史との近接性を指摘するものとなっている。この点は、軍事思想の研究に於て、その対象となる資料が所謂「兵書」に限定されないことを示唆しており、極めて重要である。しかしそうであれば、むしろ、政治と軍事との密接な関係を前提に立論する馬王堆漢墓帛書『経法』等四篇や『商君書』『呂氏春秋』などをも取り上げる必要があるのではなかろうか。

また、「倫理文化」という観点から、中国の軍事史を鳥瞰しようとするものに、顧智明『中国軍事倫理文化史』(海潮出版社、一九九七年)がある。これは、中国の軍事的伝統の中に、「倫理文化」を読みとろうとする異色の研究である。ここでは、中国軍事倫理文化の特質として、①「以仁義為本」の正義戦争観、②「以民為本」の兵民一体の建軍作戦思想、③愛国主義の精神、④厳格な自己規律を旨とする将軍の品徳修養、⑤士卒の教化や士卒の武徳の重視、⑥軍人の行為と品徳を養生するシステム、等が指摘される。

但し、戦争は、結果的に大量の殺傷を伴う残虐な行為である。この点と「倫理」とが如何なる関係にあるのか、個々の理論に即した検討が更に必要であるように感じられる。例えば、①について言えば、「仁義」や「義」を標榜する軍事行動は、確かに中国的特質と考えられるが、凡そ戦争が「正義」の名の下に敢行されるのはむしろ通常の現象であり、より重要なのは、その「正義」の内実を、個々の主張や事例に沿って具体的に検討することであろう。また、②〜⑤は全て自国の士卒を対象とするものであり、君主・将軍の側と士卒・民衆の側との間にこうした信頼関係(道徳)が必要とされるのは当然である。しかし、敵国に対する道徳性はどうであろうか。自軍の勝利にも増して、世界全体や敵軍の士卒・民に対しての「倫理」が強調されているのかどうか、やや視野を拡大してみる必要があろう。また、士卒の教化という点も、これを強調しなければ軍隊組織として機能しなかった、という前提があることにも留意する必要がある。更に⑥についても、確かに兵書の中では、軍人の品徳について多くの言が残されているが、その後の中国史の中では、むしろ軍人に対する評価は低い。先の雷海宗『中国文化與中国的兵』が、中国文化の特質を、真の兵や国民の存在しない「無兵の文化」と規定する如くである。

こうした点から、これらを特に「倫理文化」と評価し得るか否かについては、なお疑問が残る。しかしながら、この研究は、中国に於ける戦争論・平和論の特質について、

重要な示唆を与えていると思われる。私見によれば、中国には、絶対平和、恒久平和を説く平和論の系譜は形成されなかったと推測される。しかし一方、戦争論の側も、敵国の殲滅を目標とする絶対戦争を主張するのではなく、むしろ、武力行使を極力抑制せんとする思考が基盤になっていたと考えられる。これを「正義戦争観」や「倫理文化」という語で評し得るかは、また別問題としても、確かにこうした側面は、中国の戦争と平和を考える際の重要な指標になるであろう（注３）。

次に、近代軍事思想の特質を解明するための前提として古代軍事思想に論及するのが、田震亜『中国近代軍事思想』（商務印書館、一九九二年）である。ここでは、アヘン戦争以降の中国近代軍事思想が主題とされているが、その前提として、古代軍事理論についても簡述されている。著者は、先秦時代の国防と大戦略観念として、義戦を擁護し不義の戦に反対する、潜在的戦争危機の回避、同盟と外援、戦争準備と料敵、の四点を指摘している。また、秦漢以降の展開については、中国軍事理論の「発展」の特色として、①陣形研究、②技術発展への留意、③武器設計、④陰陽五行説と迷信、の四点を挙げている。

この内、先秦時代の特質として掲げられた初めの二点については、右の顧智明『中国軍事倫理文化史』同様、それが重要な特質であることは疑い得ないとしても、その内実、特に「義戦」については、各々の「義」の定義、およびその正当化の理論についての具体的検討が課題となろう。また、秦漢以降の展開について、四点の「発展」が掲げられているが、この内の④は、呪術的神秘的側面の存在を明らかにするものである。『漢書』芸文志に記される「兵陰陽」の思想は、天文観測・望気・占術などを特色とする呪術性の高い兵法であり、『孫子』『呉子』等の属する「兵権謀」の兵法とは立場を異にするものであった（注４）。この呪術的な兵法については、前掲の『中国軍事史』第四巻『兵法』の見方が象徴する如く、「迷信」「糟粕」として顧みられないのが通常である。しかし、それが「兵権謀」に対する今一つの系譜として継承されていたことは動かし難い事実であり、「迷信」か否か「発展」か否かという観点からではなく、中国兵学全体の特質に関わる重要な要素として注目すべきではなかろうか。

さて、このように、中国に於ける軍事思想研究の現状を概観し、改めて次のような諸点を、その特色として挙げることができるであろう。

第一に、軍事思想史研究が構想されたのは、中国に於ても比較的近年のことであった。所謂「思想史」「哲学史」

に於ては、『孫子』や『呉子』が僅かに注目された他は、「武経七書」所収の著名な兵書でさえほとんど取り上げられることがなかった。また、これらの記述が主として伝統的な諸子分類に基づく学派別・諸子別の構成を採ったため、「戦争」「平和」「軍事」などといった主題による通史も、容易には構想されなかったと思われる。

しかし、そうした中でも、兵家に関する記述は着実に増加し、特に、銀雀山漢簡発見以後は、『孫子』『孫臏兵法』を中心とする個別研究が量産され、更には、軍事史、軍事思想を前面に押し出した通史が著されるようになった。

第二に、研究上の問題点として、後世に設定された時代区分や学派分類に準拠した構成を挙げることができよう。例えば、先秦の軍事思想、漢代の軍事思想という区分、儒家の軍事思想、道家の軍事思想という枠組である。こうした既存の区分は、確かに一つの足がかりとしては有効であろう。しかし、先秦と漢代の間に越え難い境界を設定してしまっては、先秦から漢代への連続性という側面は捨象されてしまう。また、儒家・道家という枠組も、『漢書』芸文志以来の伝統的分類には違いないが、軍事思想自体の展開や特質を追究する際にも有効な枠組であるのかは疑問である。前掲書の一部に、法家思想や縦横家という観点から兵家を取り上げるものがあった。こうした観点は重要であろう。特に、圧倒的な軍事力によって天下を統一した秦帝国については、その政治思想・軍事思想について充分な検討を要すると思われる。

第三に、所謂「兵書」を取り上げる際、「武経七書」中心になっているのも、これと同様の問題となるであろう。何故なら、後の宋代に設定された「武経七書」という枠組を余りに強く意識することは、古代兵学の実態を歪曲することにつながるからである。『孫子』『呉子』が既に戦国時代に於て多くの読者を獲得していたことは疑いのない事実であるとしても、戦国時代の軍事思想がそれらの兵書のみによって語り尽くせるとは思われない。そこには、既存の「武経七書」という枠組を一旦解除してみる発想も必要となるであろう。

これに関連して第四に、「兵陰陽」の思想に対する冷たい評価がある。これは、中国の軍事思想研究が、史的唯物論をその主要な方法論として展開してきたことと無縁ではない。即ち、『孫子』『呉子』等については、その合理主義、「弁証法的」思考が高く評価される一方、望気や占術を尊重する呪術的兵法の側は、「迷信」的な兵法、歴史の「糟粕」として一蹴されることとなったのである。しかし、仮に「兵陰陽」の側が「迷信」であったとしても、何故そうした迷信的思考が軍事という厳しい現実世界の中で系譜を

保ち得たのか、また、そうした「迷信」と『孫子』『呉子』『尉繚子』等の合理主義とはどのような関係にあったのか、という検討が重要になるであろう。

そして第五の共通点として、自国の歴史や政治状況に対する民族的な自問が潜在しているように思われる。中国は、『孫子』『呉子』を初め、先秦時代には既に多くの兵書を生み出していた。それは、世界史的に見ても、極めて早熟な出来事であったと言える。しかし、それにも関わらず、中国の軍事思想がその後飛躍的な発展を遂げなかったのは何故なのか。換言すれば、中華意識に支えられた中華民族王朝が度々夷狄の侵入を受け、時には屈辱的な敗戦を喫し、更には征服王朝の成立を許し、列強の侵略を招いたのは何故なのか。こうした歴史と政治への深刻な問いである。右の諸研究のいくつかには、中国の軍事思想の特質を解明することによって、その解答を得ようとするものが見受けられた。即ち、文化国家である中国の軍事思想は基本的に夷狄や西洋列強のそれと異質であると考え、その特質を「義兵」の語に求めるのがその一つである。或いは、秦漢時代までの順調な発展が宋の文治主義や清の夜郎自大的政策によって停滞した結果、正当な発展を遂げられなかったとする歴史評価もある。

この内、「義兵」は、王者による止むを得ぬ誅伐を正当化する思想として、中国的特質を端的に表明するものと言えよう。それは、唯一絶対神の存在を前提とするキリスト教・イスラム教世界に於ける「聖戦」などとは確かにその性格を異にする。「聖戦」が神の名の下の残虐な侵略行動を正当化し、布教の名の下の異教徒征服の歴史を有するのに対して、中国の「義兵」は、万里の長城を越えた侵略行動には極めて慎重であった。この点は、中国に於ける戦争観と平和観との特質を考究せんとする場合、重要な指標となるであろう。しかし、「義兵」は、「聖戦」の如き絶対神の存在を前提としない結果、一方では、漠然とした内容解釈をも可能にし、あらゆる軍事行動を正義の戦争として正当化していく道をも開いているように思われる。また、軍事思想の停滞の原因を後の時代の政治状況に求める見解も、その時々の状況説明としては各々説得力を持っている。しかし、そうした各時代の政治の差異を越えた、中国の軍事思想それ自体に内在する構造的問題はなかったのか、という根本的な問いかけも必要となるのではなかろうか。

三

それでは、翻って、日本に於ける軍事思想研究の現状を概観してみよう。右のような中国の研究状況に比べると、

日本に於ける軍事思想研究は寥々たる感を否めない。もっとも、日本には、奈良時代に『孫子』が招来されてより、長きにわたる『孫子』研究の歴史がある。しかし、それらは正に兵法のための学として尊重されたのであり、文献実証主義的な学術研究に供された訳ではない。

先述のような、研究対象となるべき諸文献の資料的問題もあって、兵書、兵学、戦争、軍事思想などに関する研究は、極めて乏しい状況にある。

それは、著名な「思想史」「哲学史」の記述にも、端的に表れている。例えば、武内義雄『中国思想史』（一九三六年、初版の原題は『支那思想史』）は、従来の儒学中心・個別的説明の思想史とは異なり、思想のダイナミックな流れを解明せんとする画期的な業績であった。特に、上世期（諸子時代）にかなりの分量を当て、諸子について詳細な検討を行なっている。しかしそこには、「兵家」に関する項目はなく、「軍事」という視座も設定されていない。また、狩野直喜の講義録をまとめた『中国哲学史』（一九五三年）も、第三編「春秋戦国時代の思想」の第九章「縱横家・兵家および雑家」に於て、僅かに『孫子』『呉子』等の名を挙げるに過ぎない。もっとも、そこでは、『孫子』『呉子』の偽書説に対して、『孫子』は自著、『呉子』は門人の編集、とするなどの重要な指摘も見られる。しかしそれらも、具体的な考証を経た後の結論ではなく、また、「兵家」そのもの、或いは「兵家」と他の思想家との関係など、思想史的観点は希薄であると言える。

こうした傾向は、他の思想史の記述に於ても同様である。小島祐馬『中国思想史』（一九六八年）は、思想史の背景としての、人間の社会生活（政治・経済・法律など）を重視するが、それらと密接な関係にあると思われる「軍事」という観点からの考察は見られない。例えば、先秦については、「原始儒家思想」対「原始儒家に対立せし諸家の思想」との枠組を設定するが、後者の「諸家」の中にも兵家は取り上げられていない。また、日原利国編『中国思想史』（一九八七年）は、著名な思想家ごとの解説という構成を採り、従来の「思想史」では取り上げられなかった文学・仏教関係者にも注目する点に特色を見せるが、兵家の人物は一人も取り上げられていない。更に、赤塚忠ほか編『中国文化叢書3思想史』（一九六七年）、『同2思想概論』（一九六八年）は、学界の第一線で活躍する研究者を動員して従来の思想史研究を総括し、当時に於ける標準的な概論として登場したのであるが、やはり、兵家は取り上げられておらず、また、軍事・戦争という視座からの記述も見られない。

これに対し、兵家の思想を独立して扱った最初のものと

して挙げられるのは、『講座東洋思想3中国思想Ⅱ道家と道教』（宇野精一ほか編、一九六七年）であろう。ここでは、「付録」という位置づけながら「兵家思想」（竹内照夫）を独立項目として取り扱っている。但し、その主な内容は、主要な兵家を『史記』等の伝記に基づいて紹介し、「武経七書」の内訳を概説するというものである。そして、兵家と他の諸思想との関係については、兵家は功利主義という点で法家思想と最も近く、戦争否定の立場を取る道家とは異なるとしている。また、兵家思想の展開については、勝利本意の思想が比較的単純に露呈している『孫子』から、兵法の倫理化が強められている他の兵書への変遷として捉えている。大局的な見通しを論じたものとして評価できると思われるが、兵家と他の諸思想との関係、『孫子』から他の兵書への展開とも、更に個別の検討を要するように思われる。また、この後、大量の兵書を含む銀雀山漢墓竹簡、戦国期から漢代初期に至る道家思想の展開に深く関わる馬王堆漢墓帛書、秦の法治の実態を示す睡虎地秦墓竹簡などが相次いで発見され、こうした見通し自体についても、現在では再考の余地が生じてきたと言えよう。

それでは次に、他の主題研究の中での取り扱いについて概観してみよう。第一に挙げられるのは、『孫子』研究である。『孫子』は他の兵書に突出して、古来その意義を高く評価されてきた。中世以来の『孫子』研究の伝統は無論のこと、近年に至っても、佐藤堅司『孫子の思想史的研究』（原書房、一九六二年）は、『孫子』十三篇の篇ごとの解説の他、「日本における『孫子』研究の思想史的考察」に多くの頁を割いている。『孫子』の成立については、春秋時代の孫武を原作者、戦国時代の孫臏をその補完者と推定し、『孫子』の体系性については、その四大特色として、科学的体系、常変一体、静動一元、万全主義、を挙げる。

また、河野収「『孫子』成立の史的研究1・2」（『防衛大学校紀要』28・29、一九七四年）は、孫武論・孫臏論から成り、孫武時代、孫臏時代の事件と『孫子』の内容との照合を通じて、『孫子』の成立が四段階を経ている（①春秋末呉の孫武の研究成果、『孫子』の原案の成立、②戦国中期、孫臏による家伝の兵法『孫子』十三篇の補修、③孫武、孫臏から曹操に至る間の補筆、散佚など、④曹操による整理）との、著者独自の『孫子』成立論を提示する。銀雀山漢墓竹簡発見以前の研究成果であるが、それまで有力であった後世偽作説を基本的には否定し、春秋時代の孫武による原案の成立を主張した点は重要である。同氏の「孫子における方法論の研究1～4」（『防衛大学校紀要』30～33、一九七五～七六年）は、角度を変え、『孫子』十三篇について、その方法論を検討したものであり、戦力論・静

的戦力・動的戦力・戦争論・闘争論・管理論・将帥論・戦争戦略論から成る。

更に、一九七二年の銀雀山漢墓竹簡の発見を受けて、『孫臏兵法』の全訳を行なったのが、金谷治『孫臏兵法』（東方書店、一九七六年）である。これは、銀雀山漢墓竹簡整理小組編『銀雀山漢墓竹簡［壹］』（文物出版社、一九八五年）を底本に、その日本語訳を行ない、併せて、中国語論文の翻訳紹介や解説も行なっている。また、銀雀山漢簡『孫子兵法』を底本に『孫子』を訳注したのが、浅野裕一『孫子』（講談社、一九八六年、のち一九九七年、講談社学術文庫）である。それまでにも既に、『孫子』の訳注や解説書は数多く刊行されてきていたが、出土資料を全面に押し出した解釈は初の試みであった。同氏にはまた、出土資料の発見を受けて、現行本十三篇『孫子』の成立事情を詳細に考究した「十三篇『孫子』の成立事情」（『島根大学教育学部紀要』第十三巻、一九七九年）がある。

次に、中国の長き戦争の歴史は、民衆運動・革命思想という視点から注目を浴びることとなった。鈴木中正編『千年王国的民衆運動の研究―中国・東南アジアにおける―』（一九八二年）では、野口鐵郎・鈴木中正・浅井紀が明清代の千年王国論的宗教運動・民衆運動を取り上げている。これは、千年王国論が一種のユートピア的平和論であり、またそれに基づく宗教運動・民衆運動が聖戦として過激な軍事行動をとることを指摘した点に於て、結果的に、中国に於ける「戦争と平和」という視座を提供していると言えよう。こうした千年王国という観点から更に中国史全体を鳥瞰するのが、三石善吉『中国の千年王国』（一九九一年）である。ここでは、黄巾の乱を道教的千年王国、大乗の乱を仏教的千年王国、太平天国をキリスト教的千年王国、清末の王韜などを儒教的千年王国、義和団を儒仏道的千年王国と規定し、その思想と運動の特質を解明している。

この他、『管子』の思想の体系的理解という観点から、その「強兵思想」に注目する金谷治『管子の研究』（岩波書店、一九八七年）、斉文化という地域の特殊性からその兵法思想に着目する谷中信一「『淮南子』の成立に与えた斉文化の影響について―兵略訓を中心として―」（『日本女子大学紀要文学部』四十、一九九〇年）、同「『逸周書』研究（四）―その兵法思想について―」（『日本女子大学紀要文学部』四三、一九九三年）、東洋の自然観を追究する中で、兵家の自然観を「技術的自然」と定義する鈴木喜一『東洋における自然の思想』（創文社、一九九二年）、「気」の思想という観点から兵家の思想を取り上げる、細川一敏「兵家・黄老思想における気の役割」（『気の思想―中国における自然観と人間観の展開』、一九七八年）、竹田健二「兵家

の気の思想について―「孫氏の道」を中心に―」(『集刊東洋学』七二、一九九四年)、同「『六韜』における気の二元性」(『中国研究集刊』暑号、一九九七年)、「兵」「戦」のイメージの展開・継承を追究する関口順「春秋時代の「戦」とその残像」(『日本中国学会報』第二七集、一九七五年)、同「『漢書』刑法志論兵部分の思想史的考察」(『埼玉大学紀要』第一四巻、一九七八年)、戦国から漢初に至る軍事的教養と国造りの思想を追究する柴田昇「『尉繚子』の世界―戦国期中国における軍事的教養の一形態―」(『東方学』第九二輯、一九九六年)、同「『荀子』と兵学―戦国～漢初における軍事的教養の一側面―」(『名古屋大学東洋史研究報告』第二二号、一九九八年)、古代兵書に見える「動物イメージ」「連続性」「均衡観」などの観念を追究する久富木成大「『六韜』における動物模倣をめぐって」(『金沢大学教養部論集』人文科学篇三一巻第一号、一九九三年)、同「『孫子』における「連続性」信仰と時間認識をめぐって」(『金沢大学教養部論集』人文科学篇三一巻第二号、一九九四年)、同「『孫子』の軍事思想の特色―その勢力均衡観について」(『金沢大学教養部論集』人文科学篇三二巻第一号、一九九四年)など、興味深い論考が発表されている。

無論、数多くの思想史研究の中には、個々の思想家や文献の軍事的側面について触れるものは散見する。また、個別研究の中には、右のように、他の主題との関わりから兵家に注目するものも存在する。しかし、『孫子』によって「国の大事」(計篇)と宣言された「兵」が、研究史の上で「大事」と意識されているか、甚だ疑問である。日本に於ては、中国軍事思想の研究は、未開拓分野と言っても過言ではない状況に置かれているのである。

こうした研究状況を招いた直接的原因としては、先に指摘した資料的制約という問題が先ず挙げられるであろう。ただ、こうした直接的原因の更に背後に潜在していると思われる次のような問題も考えられる。

それは、中国が古来より「文」明国であり、「文」治国家であったという中国観である。確かに、中国は自らの祖先を荒ぶる戦争の神に求めたり、自らの民族的特質を「武勇」や「好戦」といった点に求めたりはしなかった。しかし、武力によって旧六国を併合した秦帝国は言うまでもなく、儒教を国教化した漢帝国や文治主義を標榜した宋王朝に於てさえも、軍事は決して他人事ではなく、むしろそうした「文」的印象とは裏腹に、軍備の増強、内乱の鎮圧、夷狄との抗争という生々しい「武」的現実を抱えていたのである。「武」力を保有し、それを行使してきた歴史を軽視し、思想史研究を、学術や文化などという言わば「文」的観点からのみ進めることは、歴史の実態を見失う危険を

孕んでいるであろう。

また、二十世紀後半、いわゆる科学的な学術研究が進展する中で、我が国の歴史と戦争との関係に見られる独特な雰囲気も、研究・教育の世界に影響を及ぼしていないとは言えない。このことは、現代中国に於ける古代軍事史研究がそれなりに進展している状況と対比する時、一層明瞭となるであろう。これらの点も、先の資料的制約という直接的な問題と共に、こうした主題による研究を進展させてこなかった一つの要因になっているのではないかと推測される。

それでは、こうした潜在的問題はともかく、資料的制約という直接的障壁を乗り越えて、研究を大きく進展させるには、如何なる点に留意すればよいのであろうか。それには、前節までに於て指摘した諸点に加え、更に次のような点が肝要となるであろう。

第一は、やはり、一九七〇年代に相次で発見された古代文書への注目である。それは、先述の臨沂銀雀山漢墓竹簡のみに止まらない。一九七三年に湖南省長沙馬王堆漢墓から出土した漢代初期の帛書（馬王堆帛書）、一九七五年に湖北省雲夢県睡虎地に於て発見された秦代の竹簡（睡虎地秦簡）などにも、主として、戦国時代から秦漢に至る政治・軍事の実態やそれに関係する諸思想が、豊富に含まれていた。これらにより、従来ほとんど通説となっていた偽書説の多くは、根本から再考を迫られることとなり、また、「武経七書」の枠を越えて、軍事史・軍事思想に関する諸資料が豊富に提供されるという劇的な事態が出現したのである。これらの資料への注目なくして、中国軍事思想史の構想はおぼつかない。

第二は、こうした状況によって促された、「兵家」という枠組の再考である。これらの出土資料は、後の世に設定された「儒家」「法家」「兵家」などの枠組に全く規定されていない。そこには、従来、厳しく対立すると考えられてきた王道と霸道とを連続的に捉えようとする思考、或いは「儒家」的でありながら、むしろ積極的な武力行使を説く思想、基本的には兵書でありながら、単なる兵法書には止まらず、政治や人間への深い思索が表明されているものなど、「儒家」「法家」「兵家」といった既存の枠組には収まりきらぬ多彩な内容が見られた（注5）。そこで、「兵書」「武経七書」という後世に設定された枠組を一旦解除してみれば、実は、「兵家」以外の伝来の文献の中にも、軍事について言及するものは多々存在し、また逆に、「武経七書」の中にも、「兵法」の枠を越えた政治論や人間論が存在していることに気付くのである。「兵家」の研究に際し、「兵家」の枠組を一旦忘れることも肝要であろう。

第三は、これら出土資料にも含まれていた神話伝説資料の思想史的解明である。中国は早熟な文字言語の文明を背景に、強力な中央集権的国家を早期に築き上げた。それは一元的な世界観を志向することともなり、各地に伝承されていた神話伝説の類いは、こうした世界観の下に統廃合されることとなった。その結果、ギリシア・インドなど、豊富な神話伝説を持つ古代国家に比べて、中国の神話伝説類は夙に失われ、極めて乏しい状況にあるとされる。しかしながら、神話伝説が皆無という訳ではなく、また、様々に変容を遂げながらも、諸文献にその姿を伝えてきている。こうした神話伝説資料の内、特に、戦争の神に関する伝承は、軍事思想史を語る上で、看過し得ない資料になると思われる。何故なら、戦争や平和といった観念は、戦争神の存在やその変容の過程に、必ず反映されていると思われるからである（注6）。

以上、本稿では、中国・日本に於ける諸研究を概観しつつ、中国軍事思想研究の状況と課題について論じてきた。

中国思想の研究を広大な大地に譬えれば、中国軍事思想史の研究は、なお陸の孤島の感を否めない。一方、右に指摘してきた個々の課題についても、それらを乗り越えて新たな地平を切り開くのは、至難の業である。

しかし、そうした課題を明確に意識し、その解決を模索することは、少なくとも、これまでの「文の国」という美しき中国像に、「武」という要素を加える試みとはなるであろう。それは、決して「文」の否定ではない。こうした「武」の思想の研究が、より豊かな「文」の歴史の発見につながると思われるからである。

注

（1）銀雀山漢墓竹簡古佚兵書の実態については、拙稿「銀雀山漢墓竹簡古逸兵書の研究―「王兵」篇の考察―」（『古代文化』第四三巻第十二号、一九九一年）、および「銀雀山漢墓竹簡『守法守令等十二篇』の思想史的意義」（『中国研究集刊』辰号、一九九三年）参照。

（2）呉起の思想と活動については、拙稿「兵家の思想と活動」（『しにか』一九九九年二月号）参照。

（3）この点については、拙稿「中国古代の戦争と平和」（岩波書店・岩波講座『世界歴史』第25巻、一九九七年）参照。

（4）この点については、拙稿「『尉繚子』の富国強兵思想」（『東方学』第六九輯、一九八四年）、および「『呂氏春秋』の軍事思想―兵陰陽家著作説をめぐって―」（『呂氏春秋研究』第五

号、一九九二年）参照。

（5）例えば、馬王堆帛書『明君』には、従来、先鋭に対立すると考えられてきた「王道」と「霸道」とを連続的に捉えようとする思考が窺える。また、同じく馬王堆帛書『称』は、為政の原理としての「文」「武」両者を、陰陽・四時の規則的な交代変化を規範として、同等の価値を持ちつつ併存させるべきであると主張している。これらの詳細については、拙稿「馬王堆帛書『明君』の思想史的意義」（『中国研究集刊』宙号、一九八八年）、および「「称」の思想―馬王堆漢墓帛書『称』に於ける天道と統治原理―」（『島根大学教育学部紀要』第二三巻第二号、一九八九年）参照。

（6）中国古代の戦争神として著名なのは蚩尤である。蚩尤は、中国史上初めて戦争を興し黄帝と戦って敗れたとされるが、一方、蚩尤を戦争神とする諸伝承も豊富に存在する。この問題については、拙稿「軍神の変容―中国古代に於ける戦争論の展開と蚩尤像―（一）」（『島根大学教育学部紀要』第二六巻、一九九二年）、「軍神の変容―中国古代に於ける戦争論の展開と蚩尤像（二）」（『島根大学教育学部紀要』第二七巻、一九九三年）、「馬王堆帛書『十六経』の蚩尤像」（『東方宗教』第八九号、一九九七年）参照。